

《新会員のひと言》



遠く美しい憧れの国ポーランド

小田 晃孝

ポーランドという国は私にとっては精神的にも地理的にもとても遠い国でした。なんとなくどこかで聞かされた、時代の波に飲み込まれた不幸な歴史と、放射線研究でノーベル賞を受賞した物理化学者キュリー夫人くらいしか浮かんでこないという乏しい知識の上に、冷戦時代の閉ざされた東欧の国という暗いイメージを勝手に塗り重ねて、特別な興味を持つことなくこれまで暮らしてきたという訳です。

しかし、この会に誘っていただき、画面に映し出された美しい建物や民族衣装、自然の風景を見て、また小学校の時からよく知っている大音楽家ショパンが、てっきりオーストリア出身だと思い違いしていたのが、ポーランド出身だと聞いて驚き、さらにその後、大好きな女優ジュリエット・ビノシェが主演したことで映画館で見てその映像美に感動し好きな映画ベスト3に入った「トリコロール／青の愛」の監督であるクシシュトフ・キェシロフスキが、生粋のフランス人ではなく実はポーランド出身と聞いたことで一気に興味津々の国となり、ぜひ死ぬまでに一度は訪れたいと思うようになりました。

そしてフィンランドに新千歳空港から直行便が飛び始めたと聞いたので、機会を捉えて少し長い休暇が取ればポーランドの自然や文化、人々に触れる旅を試してみたいと思いますが、そこは貧乏暇なしの私ですので、実際の訪問は遠い話と思われ、

この会を通じてその一端に触れることができると望んでおります。

(おだ・あきたか)

ポーランドへの旅

中條 峰人



はじめまして。昨年北海道ポーランド文化協会に入会しました。会員の一人としてポーランド文化・歴史に触れる事で知識や交友関係を深める事が出来れば僕としては幸いです。

ポーランドに関わるきっかけは卒業旅行のアウトシュビッツでした。そこにはホロコーストや戦争の惨劇を伝える為に数多くの遺品や写真が展示されていました。戦争を知らない年代である僕達だからこそ歴史を学ぶ意味が有り、同じ過ちを繰り返してはならない心構えを持ち続ける大切さを知りました。

あまりの惨い写真に言葉も出ず、ドイツが犯した過ちについても考えさせられましたが、戦時中に同じ過ちを犯し、アジア諸国に大きな苦しみを与えた日本の歴史も直視すれば、我々日本人も人殺しの子孫である事は間違いないのです。

このような歴史的負の遺産は、後世にも残し続けるべきであると思っています。

短いポーランド旅行ではありましたが、初めての一人海外旅行でもあり、僕の人生にとって大きな心の財産にもなりました。

ポーランドに関しては、未だ解らない事が殆どですが、会員の皆様との交流を通して、多くの事を学びたいと思っています。よろしくお願いします。

(なかじょう・みねと)

ズビグニェフ・ヘルベルト詩集
『我思う氏 Pan Cogito』より(栗原成郎訳)

Pan Cogito a ruch myśli

我思う氏(パン・コギト)と思考往来

思考たちが頭の中を行き来すると
常套句が口に出る

常套句が
思考の往来を過大評価する

思考たちの大部分は
身じろぎもせず立ちつくす



荒涼とした風景のまん中で
灰色の丘陵のまん中で
枯れた樹々のまん中で

ときおり それらは他人の思考の
急流にたどり着き
その岸边に佇む
一本脚で
腹をすかした青鷺(あおさぎ)のように

悲しげに
涸れた水源を回想する
ぐるぐる回って
穀粒を探し求める

行き来することはない
たどり着かないのだから
行き来することはない
行き着く所が無いのだから

石の上に座ったまま
悲嘆にくれて手をもむ

頭蓋の
曇った
低い
空の下で

Pan Cogito a myśl czysta

我思う氏(パン・コギト)と純粹思考

我思う氏(パン・コギト)は
純粹思考を達成させようと努める
せめて眠りに落ちる前に

しかしその努力そのものがすでに
敗北の胚子をはらんでいる

それで「思考 水の如し」
と思う心境に達したとき
無関心な岸の辺(へ)に
満々たる純粹の水

突然 水面に波紋が生じ
波が打ち寄せ
ブリキ製の空き缶
流木
誰かの毛髪のひとつを運ぶ

本当のことを言うと 我思う氏(パン・コギト)に
まったく落ち度が無かったわけではない
彼は 内なる眼を
郵便箱から
離すことができなかった
鼻孔に海の香を嗅いでいた
蟋蟀(こおろぎ)が耳をくすぐっていた
あばら骨の下に存在しない女(ひと)の指を感じて
いた

他の家具付きの思考のように
凡庸な状態でいた
椅子の肘掛の上に置かれた手の皮膚

頬の
優しさの皺

いつの日か
いつかのちの日に
彼が冷たくなったとき
「satori」(悟り)の境地に到る

そして師匠たちが指示するように
虚心で
驚嘆すべき者となるだろう

Dusza Pana Cogit

我思う氏(パン・コギト)の魂

かつて
ぼくらは 話に聞いて知っていた
魂は 心臓が止まったとき
体を離れていくのだと

最後の息と共に
静かに飛び去っていく
天の牧場へと

我思う氏(パン・コギト)の魂は
別な行動をとる

生きているうちに体を離れる
別れの言葉も言わずに

何か月も何年も
他の大陸に滞在する
我思う氏(パン・コギト)の国境の彼方に

その住所(アドレス)を知ることはむずかしい
自分の消息を知らせてくれないから

接触を避けて
手紙を書かない

いつ還ってくるか 誰も知らない
永久に立ち去ったのかもしれない

我思う氏(パン・コギト)は 嫉妬の卑しい感情を
克服しようと努力する

魂のことを 善意をこめて想う
魂のことを 優しさをこめて想う

必ずや他の人々の体の中にも
住んでいるに違いない

魂は 全人類に行き渡るには
確かに 少なすぎる

我思う氏(パン・コギト)は運命と和解する
それ以外に出口はない

せめてこれだけは言おうと努める
「ぼくの魂は ぼくのものだ」

魂のことを 愛情をこめて想う
魂のことを 思いやりをこめて想う

それで魂が 思いがけず
姿を現わすとき
「お帰りなさい」
の言葉をもって迎えはしない

ただ横目で見ているだけ
魂が鏡の前に座って
もつれた 白くなった
髪をくしけずるのを

ズビグニェフ・ヘルベルト(1924-98) ポーランドの詩人、エッセイスト、劇作家。第二次世界大戦中、国内軍のレジスタンス活動に参加。1950年代に詩を出版しはじめたが、間もなく自分の意思で政府公認の出版物に書くのをやめ、80年代に主に地下出版で発表を再開。戦後ポーランドの反体制派詩人を代表し、最も有名で最も数多く(38カ国語に)翻訳された作家の一人で、何度もノーベル賞候補に挙げられた。(en.wikipedia より)

photo: Bohdan Majewski / Forum, 1974

第 33 回定例総会議案

(議長 村田謙)

第 1 号議案 2019 年度(2018.9-2019.8)活動報告
について(小笠原正明)

1.《第 32 回定例総会》、豊平館、2018 年 11 月 11 日(日:ポーランド独立回復 100 周年記念日)16:00 ~20:00、参加者:総会 25 人、懇親会 日本人 40 人、ポーランド人&家族 21 人

2.例会

(1)《第 87 回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会 2019、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2019 年 2 月 20 日(水)18:00~22:00『大理石の男』1977 アンジェイ・ワイダ監督&懇談会、司会:佐藤晃一、参加者約 30 人

(2)《第 88 回例会》「樺太時代の忘れ物」ポーランドへの誘い〜プロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年記念行事報告、講演:尾形芳秀、朗読:熊谷敬子、聞き手:松山莞太;國井星太、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2019 年 3 月 3 日(日)13:30~16:30、参加者約 60 人

(3)《第 89 回例会》プロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年記念講演の集い(2)〜日本・ポーランド国交樹立 100 周年記念、講師:井上紘一「プロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事」、新井藤子「日本で取り組まれてきたプロニスワフ・ピウスツキ研究の系譜」、北大学術交流会館第4会議室、2019 年 3 月 16 日(土)13:30~16:30、共催:北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、ポーランド広報文化センター、後援:ポーランド大使館、(公財)アイヌ民族文化財団、参加者約 40 人

(4)《第 90 回例会》朗読と交流の会:午後のポエジ

ア 9〜私のポーランド〜日本・ポーランド国交樹立 100 周年記念、北大クラーク会館 3F 大集会室 2、2019 年 6 月 1 日(土)14:00~17:00①ポーランドの絵本の紹介や古今の詩の朗読②語りとピアノ演奏、ギターと歌、スライドショー、劇、みんなで弾いて歌って踊ってなど、共催:ポーランド広報文化センター、後援:札幌国際プラザ

(5)《第 91 回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会 2019-2、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2019 年 7 月 3 日(水)18:30~21:20トーク/作品とその背景:三浦洋&『カティンの森』2007 アンジェイ・ワイダ監督&懇談会、参加者約 35 人

4.会誌 POLE No.95 (2018.9.15), No.96 (2019.1.31), No.97 (5.1)発行

5.運営委員会 2019 年度①2018.10.4 ② 2019.1.29 ③4.22 ④7.29

6.共催・後援・協力事業

(1)〈後援〉松井亜樹ソプラノリサイタル〜ドームラ奏者アンドレイ・クガエフスキー氏をお迎えして、ふきのとうホール、2018 年 9 月 21 日(金)19:00~

(2)〈協力〉プロニスワフ・ピウスツキに関するコミック:ラファウ・ゴシエニエツキ画 2018 年 10 月

(3)〈後援〉徳田貴子ピアノリサイタル、ザ・ルーテルホール、2018 年 10 月 28 日(日)19:00~

(4)〈後援〉北濱佑麻&徳田貴子ピアノデュオコンサート〜アメリカの風を感じて…、Kitara 小ホール、2019 年 1 月 23 日(水)19:00~21:00

(5)《共催》さっぽろ雪まつり第 46 回国際雪像コンクールにザブジェ市から彫刻家コツランガ氏をリー

ズビグニェフ・ヘルベルト Zbigniew Herbert 詩集より (栗原成郎訳)



我思う氏 (パン・コギト) の終末論的予感

Przeczenia eschatologiczne Pana Cogito

1

我思う氏 (パン・コギト) の生涯において
 どれほど多くの奇蹟
 運命の気まぐれな急転
 眩耀 (げんよう) と転落があることか
 それゆえ彼は苦渋に満ちた
 永遠をもつことになろう

旅無し
 友無し
 書物無し

時間を持て余し
 肺を病む人のように
 流涕 (るたく) の身の皇帝のように

彼は決然として煉獄の
 大広場を掃き清めるだろう
 あるいはさびれた理髪店の
 鏡の前で無聊 (ぶりよう) に苦しむだろう

ペン無し
 インク無し
 羊皮紙無し

幼年時代の思い出無し
 世界史無し
 鳥類図鑑無し

他の人々と同じように
 彼は俗世の習俗に鈍感になるよう
 忘却講習会に通うことになろう

天国人事選考委員会は
 きわめて正確に機能しており

天国行きの候補者たちの
 情欲の残滓 (ごんし) を根絶する

我思う氏 (パン・コギト) は身を護るであろう
 頑強に抵抗して

2

いともたやすく自分の嗅覚を手放す
 彼はそれを適度に用いてきたのに
 一度たりとも誰かの足跡を嗅ぎつけたりはしな
 かったのに

同じく惜しげもなく手放す
 食事の味覚を

飢餓の味覚を

天国人事選考委員会のテーブルに
 耳たぶを置く

現世の生活では
 彼は静寂の愛好者だった

ただ
 視覚と触覚を
 奪わないでほしいと
 厳格な天使たちを
 説得できさえすれば

この地上の棘 (とげ) を
 尖った破片を
 愛撫を
 炎を
 海の波の鞭を
 肌で感じるができるようにと

山の断崖の松を
 早朝祈禱の七つの燭台を
 青い筋のある石を
 なおつづけて見るができるようにと

彼はあらゆる責め苦に屈する
 優しい説得に屈する
 しかし最後まで守り通すだろう
 痛みの素晴らしい感覚を

そして焼けただれた目の底の
 一對の色褪せた聖像を

3

誰が知ろう
 天国の
 勤務には
 不向きであることを
 天使たちに納得させることに
 成功するとは

そして天使たちが彼に
 草の生い茂る細道をとおって
 美しい海の岸辺の断崖の
 初原の岩窟に帰ることを
 許すとは

(くりはら・しげお、東京大学名誉教授)

=写真= Z. Herbert 1963 ©PAP/CAF/Marek Langda